

ただ今、 道産子修行中!

まさごのりこ北海道魅力発見録

～その1～

北海道・地名の由来

真砂 徳子

フリーアナウンサー

9年前、関東の地方都市から札幌へ移り住んだばかりの私は、「あずましい」と言われてもキョトンとしているほど、北海道の方言もままならずであった。それが、である。お花見にジングスカンは当たり前、夏は札幌の大通公園で昼寝、秋には観楓会を楽しむ。冬の雪かきにもへこたれず、健康維持のため歩くスキーを少々。飯寿司とルイベは大好物、ジャガイモをふかしたら塩辛を添え、身も心も、今ではすっかり「道産子気取り」。取材では、全道津々浦々を飛び回る、自称・道産子アナウンサー。これだけ北海道を知ったんだもの、そろそろ「自称」を外してみても…と思った矢先である。北海道にまつわる意外な事実を知ったのだ。

「え！ 北海道ってアイヌ語なの？」

北海道は、もともとは「北加伊道」と書いたそ

うだ。北海道の名付け親・松浦武四郎（1818－1888）の足跡をたどった番組「月尾嘉男・未来世紀日本」（北海道テレビ放送2005年4月～'06年3月放送）に出演することになった私は、思いがけず北海道命名の由来を記す木碑を目にすることになった。天塩川沿いに建てられた木碑によると、安政4年（1857）、5度目の蝦夷地探検の折、武四郎は丸木舟を使い、アイヌの人々の案内で、天塩川の河口から遡る。多数のチョウザメを見て驚きながらの帰り、音威子府にある天塩川の支流の鬼刺川で長老アエトモに出会い、アイヌの人たちが自分のことを「カイナー」と呼ぶ理由を尋ねた。アエトモは、「カイ」は「この国に生まれた者」、「ナー」は「旦那」という敬称だと教えてくれた。

そして明治2年（1869）、6度に及ぶ蝦夷地探検で「蝦夷地通」としての名声を得、明治政府の開拓判官となっていた武四郎に、政府から蝦夷地に新しい名前を付ける命令が下り、武四郎は、その「カイ」を読み込んだ「北加伊道」という名前を提案したというわけだ。これが松浦武四郎が北海道の名付け親といわれる所以である。

安政6年（1859）、武四郎が徳川幕府の命令で作成した蝦夷地の地図「東西蝦夷山川地理取調図」には、アイヌ語の地名が克明に記録されている。例えば知床半島の先端は「シレイトコ」と書かれ、「土地の先端」という意味との事（ちなみに礼文島の最南端も知床である）。苫小牧は「トーマコマナイ（沼の後ろにある川）」、「真駒内」は「マクオマナイ（山の方にある川）」、登別は「ヌプルペツ（水の色濃い川）」、留萌は「ルルモオッペ（潮の静かな川）」、稚内は「ヤムワッカナイ（冷たい飲み水の川）」、ペツ「川」、ナイ「沢」、ピラ



松浦武四郎（1818-1888）
（北海道大学附属図書館所蔵）



東西蝦夷山川地理取調図（北海道大学附属図書館所蔵）

「崖」、ト「沼・湖」、ヌプリ「山」などが地形を表し、ポロ「大きい」、アシリ「新しい」、クネ「黒い」などは、その性質を表すようで、言葉の組み合わせから、由来をあれこれ想像するのも、パズルのようで、これまたなかなか面白い！

「東西蝦夷山川地理取調図」には、当時の山並や川筋の曲線が、武四郎自らの手書きによって詳細に描かれているが、地名に込められたアイヌ語の意味を知るにつれ、その風景は、まるで今ここにあるかのように眼前に浮かんでくる。と同時に、アイヌ語は北海道の歴史を語る貴重な資産であることを思い知らされるのである。

地名が土地の歴史を語るのは古今東西に通じることである。北海道のお隣、ロシアの第二の都市サンクトペテルブルク。地名はキリストの12使徒の一人聖ペトロにちなんだ「聖ペトロの町」という意味であるが、1682年から1725年まではロシア皇帝であったピョートル1世にちなみ「ペテルブルク」、すなわち「ピョートル皇帝の町」と呼ばれていた。第一次世界大戦ではドイツと戦ったロシア。ドイツ風の名前ではまずいということになり、「ブルク」をロシア語の都市を意味する「グラード」に変え、「ペトログラード」とした。ところが、1917年のロシア革命でロシア帝国が滅亡。ソビエト連邦共和国になり、その中心人物であったレーニンが1924年に亡くなると、その5日後に、地名は「レニングラード」に。そして1991年、ソビエト連邦も崩壊してロシア共和国になり、再び「サンクトペテルブルク」に戻るというわけである。地名の変遷が権力の変遷を示す興味深い例である。

ところで日本には、「三大珍市名」といわれる都市名がある。埼玉県のさいたま市、山梨県の南アルプス市、愛媛県の四国中央市。いずれも平成の市町村大合併で生まれた地名だ。その他にも、一昨年、鳥取県に誕生した「湯梨浜町」は、合併した3町村の名物（「湯」どころの^{ゆり}羽合町、泊村の20世紀「梨」、東郷町の砂「浜」）を合わせた地名だという。この大合併により、日本の市町村数は2001年の3,224から今年の4月1日には1,821になるということだが、さまざまな事情はあれど、見た目や語感を重視した命名により、地域に根差した由緒ある地名が消えていくことはさみしい事だと思う。



「月尾嘉男・未来世紀日本（北海道テレビ）」撮影風景
北海道命名の地木碑の前で

さて、そんなご時世を憂いつつ、改めて北海道の地名を考える。語源のおよそ8割はアイヌ語と言われる北海道の地名。おかげで、姿形は漢字に変われど、その由来をひも解けば、当時の地形の特徴や産物、そして人々の暮らしぶりが生き生きとよみがえってくる。地名は過去からの大切なメッセージ、となれば、どうかひとつでも多くの地名が、消えずに維持される事を願うばかりである。

とはいえ、この私。北海道の地名をよく読み間違える。胆振をタンフリ、渡島をトシマ、樞法華、厚岸、妹背牛…、原稿に記載された漢字に絶句したこと数知れず。そういえば、増毛をゾウモウと読んだ事もあったっけ!? 自称・道産子アナウンサー、まだまだ修行は足りないようで。道民の皆様、今後ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



profile

真砂 徳子 まさこのりこ

フリーアナウンサー。

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設した。<http://www.masagonoriko.com/>